巻頭言

砂防がより多くの人から支持されるために

海堀 正博 かいぼり まさひろ
広島大学大学院 総合科学研究科 准教授

先日アメリカ合衆国のオバマ大統領の就任式があった。メディアを通じてアメリカ国民の熱狂ぶりが伝わってきた。それどころか世界中の多くの人が今回の大統領就任劇を伝えるメディアに目を奪われたり耳をそばだてたりしていた。いったい何がそうさせたのか。

おそらく彼の発してきたメッセージが人々を虜にしたのだろう。人種や主義や世代や地域を超え、あらゆる階層の人々の心を動かす力がそこにはあった。世界的な大不況はアメリカ発の経済危機がもたらしたものであるが、同時にそれは世界中に不安定な政情と混乱を産み出しただけでなく、未来への希望さえ抱けない重苦しい空気で包み込まれ、先の見えない状況をもつくり出していた。彼のメッセージは、あらゆる階層の人々が手を取り合って協力することでその暗い状況から抜け出すことができる、アメリカをよい方向に変えることができる、ということを予感させるものであった。アメリカが変われば、世界の状況も好転するだろう。よその国のできごとであるのに、何と多くの人々がそのような期待を抱いていることか。あらためて将来に夢や希望が抱けることの重要性を強く認識することができた。

私はそのとき砂防も同じことなのではないかと思った。防災とはいのちを守ることである。砂防の場合、人のいのちを守るために、土砂災害の発生危険の有無を調べ、その情報をハード対策やソフト対策などに活かしながら防災を進めている。たとえば、危険度の高い地域を守るためには堰堤や護岸工など砂防施設による渓流の保全を図る場合があるが、これによって多くの人のいのちを守ることにつながっている。しかし、砂防施設やその建設に対する世間一般の風当たりは近年その強さを増しているように感じられる。簡単には施設を導入できないような状況が増えているように思われる。どうしてこのようなことになるのだろうか。

ひょっとすると「安全」「安心」を追求するあまり、何か魅力を失わせる砂防になってしまっているのではないだろうか。自然の持つ不安定さや激しさやスリルなど、危険性をも伴う要素が、じつは非常に重要な魅力的要因だったのではないか。そういえば、断崖絶壁や今にも落ちてきそうな巨大な岩塔、湧き上がる噴煙などの景観には、危なさ以上に自然の神秘や力強さなどむしろ魅力を感じているのではないか。

いのちがあるというのは変化することでもある。たとえば、広島県宮島の紅葉谷川庭園砂防では季節による色づきの異なり、年によるその色づき方の違いが感ぜられじつに自然である。大雨の時には土砂混じりの水が流れることもあれば、雨が止んでしばらくするとみごとに透明な水流に変わる自然さもある。自然のいのちがみごとに生かされている。「変化する」自然の魅力を損ねることのないような砂防ができれば、いのちを守る砂防はもっと多くの人々に支持されるものになることだろう。

いのちを守るということは、ただ、いのちが保たれればよいというのではなく、生きていてよかった、助かることができてよかった、とまずは思い、その後も思い続けられるようにすることであると思う。生きたい、助かりたいという気持ちが人々の根底にあること、そのうえで、生かせたい、助けたい、という気持ちでいのちを守ってあげられることが重要である。「安心」「安全」の確立だけではなく、生きていることに喜びや希望を抱けるような環境をも同時に創りあげていくことこそ、本当の意味での「いのちを守ること」ではないか。砂防を通してそれらが実感できるように豊かな生き方につなげられればと願っている。